

『ポストヒューマン宣言』——Maniac なポストヒューマンたち

海老原豊先生インタビュー

2021年8月に『ポストヒューマン宣言 SFの中の新しい人間』を出版された、巽ゼミOBの海老原豊先生にインタビューを行いました。本インタビューでは、『ポストヒューマン宣言』を執筆された経緯から、ポストヒューマンと「狂気」について伺っています。今SFの中でもホットな話題である「ポストヒューマン」についてということで、SF好きは必見です！ 最後には巽先生や小谷先生との思い出も語って頂いていますので、巽先生・小谷先生ファンの方も必見です<(_ _)>

1. 『ポストヒューマン宣言』はいかにして書かれたか？

——『ポストヒューマン宣言』を執筆するに至った経緯をお聞かせください。

海老原：大学院の時に小谷先生から評論の仕事を一冊頂きました。その後、日本SF作家クラブがやっているSFの評論賞に応募したらそれが優秀賞となり雑誌に載りました。この二本が学生中に書いた商業評論だったんです。そのあとかれこれ十五年くらい、年に一本か二本か評論の仕事をちょこちょこしていて、だいたい溜まっていたのでそろそろ形にしようかなと思い、二年くらい前から書き直しをしていました。出版社に持ち込む時はもう出来上がったものを持ち込むと話が早いということを知ったので、とりあえず一冊分くらい原稿を書き、前書き・目次も全部つけて、まず巽先生にご相談ということでメールで送りました。それで以前SF関係で仕事をしたことがある小鳥遊書房さんを紹介してもらい、編集者の高梨治さんに同じ原稿を送ったら「出しましょう」という二つ返事で引き受けて頂きました。それからとんとんと出たって感じですね。



海老原豊
『ポストヒューマン宣言』
SFの中の新しい人間
小鳥遊書房(2021年)

——ということは、かなり前から『ポストヒューマン宣言』の内容はあたためていたということですか？

海老原：今までは来た仕事を返していました。そういう時は作家で企画がくるんですよ。よく書いていたのが『ユリイカ』なのですが、『ユリイカ』だと「映画が出るからその映画の原作を特集しよう」とか、「新作が出るかその作家の特集をしよう」ってことで作家論をよく頼まれて書いていたんですね。それが溜まっていったのと、ウェブなどで書き散らかしてたものもありました。一から全部書くのもしんどかったので、前

書いたものを書き直し、整理していたら「これはポストヒューマンで区切れば十章くらいになるな」と思ったんです。そして実際にそれが十章一冊分になったという感じがすね。

——『ポストヒューマン宣言』はどのような方に読んでもらいたいですか？

海老原：やっぱり一番は SF が好きな人ですね。わりと古い作品から新しい作品まで、小説のみならずさらに映画やマンガも含めて広く論じているので、SF 好きの人には読んでもらいたいと思います。

映画についていえば、十ある章の中で四つ、『エイリアン』、『マトリックス』、『ターミネーター』、AI 映画を扱っています。まあまあな分量で論じているので、映画が好きな人にも読んでもらいたいです。SF にしぼると読者はそこまで多くないので、映画にも広げた方が売れるかなっていうのもあります。『ターミネーター』はビッグバジェットのアクション映画で、研究や評論ではそれほど語られてない気がしたので、一章まるまる論じているところは売りっちょ売りですね。

あともうひとつの読者像に研究者がいます。最近、ポストヒューマン、トランスヒューマン、人間拡張ということで、人間に腕や足をつけたり頭にチップを埋め込んだりという研究がやられている。アメリカだと

シリコンバレーの企業やイーロン・マスクの出資する研究所が実験をしています。「そういう実験をすることは倫理的にどうなのか？」という話もちろんあり、人間拡張にまつわる思考実験や哲学・倫理的な問いを考えるうえで SF は有用だと思うので、理系寄りの人にも読んでもらいたいと思っています。

——『ポストヒューマン宣言』はアメリカの作品だけでなく日本の作品にも言及していますが、アメリカ文学の枠組みにはとらわれない本ということでしょうか。

海老原：修士までしか大学院にいなかったの、「アメリカ文学やってます！」と言えるほどの知識はありません。私は研究者でもないし専門家でもないんですが、じゃあ何ができるかというと、読んだ本の批評を書くことはできます。批評対象は文学っていうよりはエンタメ寄りです。とはいえエンタメだからといって面白くないわけでも価値がないわけでもない。そこは大学の研究者との棲み分けかもしれないですね。求められているものも違うということ。

ただ、巽先生の『アメリカ文学史のキーワード』や習った文学史の知識、大学院でやった批評理論などが根底のところでは残っています。その上にのっかっているのは個々の作品と批評なわけです。

2. 「ポストヒューマン」とは何か

——私が本書を読んでいて思ったのはポストヒューマンの定義はかなり広いということです。すべての SF 作品にポストヒュー

マンが出ていると言っても過言ではないような気がしたのですが、実際のところいかがでしょうか。

海老原：ご指摘の通り、広いですね。体に新しい機能をつけたり、半分をロボットにしたり、人工知能をインストールしたり、典型的なものも扱ってますが、「え、それも？」と思われるようなものも含めて広くやっています。広くやると見えてくるのは、本質的・抽象的な部分です。突き詰めていくと、古くからある精神と身体の二項対立的なものが見えてきて、どこにでもポストヒューマン思想を読みこんでいけるかなって気付きました。デカルトまで遡ってもいいしプラトンまで遡ってもいいし。西洋の

話ですが、どこまで遡っても、入れ物としての体とそれを操る精神という人間の二重性があります。精神が入れ物をアップデートする、またアップデートされた入れ物がさらに精神をアップデートするという競合関係は、文学部の純文学っぽいものにも見えるんですね。その辺はおっしゃる通りです。ポストヒューマンを広く捉えるメリットとしては時代・場所を超えて広く論じられることですが、デメリットとしては抽象化しすぎているのではないかという懸念があります。

3. “Maniac”なポストヒューマン

——今回のパニカメのテーマは“Maniac”です。『ポストヒューマン宣言』で言及されている作品には狂気的なシーンがあったりすると思うのですが、ポストヒューマンという枠組みの中で狂気というものはポストヒューマンに影響を与えているのでしょうか？

海老原：狂気というと、自分が狂気と思っていないところが狂気な気はしますよね。皆さんもそうですが私もアメリカ文学を勉強していたので、太平洋の向こう側のアメリカを見ていくわけですね。ここからアメリカは距離があるから向こうのマニアックさには気づく。ただ我々のマニアックさは、逆に見てみないと分からない。最近CNNを見ると、アメリカの学校ではコロナ対策のマスクつけるかつかないかで議論とか喧嘩が起こっているんですよ。マスクをつけて学校に行く子に向かって、マスクをつけないで来ている子供と親が怒鳴ったり。教育委員会みたいなどころでも議論

が起こり、本当に真っ二つに割れている。何でこんな些細なことで喧嘩しているのかわかって思うんですが、彼ら彼女らなりのロジックがあって、自分たちの大事なものを守りたいということが根底にある。向こう側の人にしてみればすごく当たり前に行われていることだと思うんですが、太平洋のこちら側からしたらある意味で狂気に見えるんですよ。

それで、シリコンバレーのお話をさっき出しましたが、新興テックベンチャーみたいにIT産業をのし上がっていった人たちの中には、色々な思想的な影響を受けて、人間的な体をテクノロジー的に改変すれば人間の限界を超えられるよね、とプリミティブに信じてる人たちがいるんです。「寿命脱出速度」というのがありますが、人間が老いるそのペースよりも早く人間の寿命を伸ばすことができれば、事実上人間は死なない、という。一年間かけて寿命が二年伸びる薬を開発できれば、投資した一年分で

二年伸びるので、実際死ななくなるじゃないですか。まあそれは絶対ありえないんですが。要はそういう研究を真面目にしている、冷凍睡眠したりとか頭にチップ埋め込んだり、そういう文脈でポストヒューマンだとかトランスヒューマンだとか結構真面目に言うんです。それはまあ海のこっち側から見ていると完全にある意味狂気の人だと思いますよね。

そしてそれはずっと遡って行くと、すごくピューリタンのというか宗教的なものと繋がっているんじゃないかなと思います。マスク論争もそうだし、あるいはポストヒューマンを実現するようなテクノロジーへの投資でもそうですが、アメリカの人たちは当たり前のようにやっている。でもちょっと距離を置くとおかしいと思える。なんで彼らは当たり前のようにやっているかという、昔から連綿と宗教で当たり前化されてきたある種の狂気が内在化されているというのはあるのではないのでしょうか。

ポストヒューマンっていう思想自体、狂気の産物だと思います。私自身はアメリカ的なポストヒューマンの思想それ自体を文字通り信じて考えるかといえば、そんなことはありません。人間はいずれ死ぬだろうし、寿命も超えられないだろうし、どれだけ体をいじったってそれにも限界はある。こんな風に向こうの人にとっての理想を「狂気」として括弧づけして、ファナティックでファンダメンタルな神がかった思想だと思って私は受け入れています。

ただ当然向こうの人たちにとってみれば、我々が当たり前のように思っている考え方こそ狂気かもしれません。例えば「なぜ日本の国民は何も言わずにみんな朝から晩ま

でマスクつけてて、誰もいない屋外でもマスクつけてて平気でいられるの？」って向こうの人からしたら思うかもしれないし。我々もマニアックな狂気を常識や当たり前として思って生きているのかなって思うので、ポストヒューマンは括弧つきの狂気だと私は考えるけれども、だからといって私が正気かということそういうわけでもないって話です。

——ポストヒューマンを書いている側は、それを狂気だとは全然思っていないという可能性があるということですよ。

海老原：そうですね。巽先生や色々な人が言っているわけですが、白人が入植した時アメリカという場所は厳しい場所でした。厳しい中で宗教的理念を持って建国したので、常に目の前の現実の厳しさが、正反対の天国的というか聖書的な理想郷と常に二重写しになっている。聖書を持ちながら、現実の荒野をそこが理想の地だと思って…でも、絶対理想の地のわけないじゃないですか。現実の厳しさと理想の素晴らしさというのは常に二重写しになっていて、現実が厳しければ厳しいほど、だからこそいいんだというようなレトリックがずっとアメリカの文学の中であります (American Jeremiad)。キング牧師や大統領のスピーチにも端々に出てくる「こんな局面だからこそ」という謎のレトリックです。これもまた、アメリカ的な狂気だとは思いますが。

ポストヒューマンの「こんな我々のちっぽけな肉体だからこそ、未来への可能性があるんだ」という思想には、現実の厳しさと理想の素晴らしさが不思議に同居する、アメリカ建国以来の連綿と続くレトリック

が見いだせるのではという話です。文学史
な SF を読んでいても、様々な繋がりは
発見できます。

を学ぶと、文学とはあまり関係のなさそう

4. ポストヒューマンと科学

——『ポストヒューマン宣言』66 ページの
「科学を基盤にしながらか科学が答えられな
い意味について問う虚構である SF」という
ところにはとても納得しました。近年の SF
作品を見ていて海老原先生は SF とは現実
の科学に先立つものだと思いますか？ そ
れともやはり現実の科学が先立って SF が
生まれてくるのでしょうか？

海老原：最近の研究者は SF を読んで育っ
たということをはっきり言いますね。最近
話題になっているのは、中国が SF にか
けるお金が本当にすごいということです。作
家を育てて賞を与えたり、若手の読者を育
てたり、科学教育という文脈で SF を使っ
ていこうとしています。作家になるのもい
いし、あるいは SF 的な想像力が育った人
が科学者になって現実に新しい発明を作っ
たりして、社会にフィードバックするのも
いいし、そこは巧みに使い分けてますね。
科学に投資したからといって科学に返って
くるわけでは必ずしもないので、ソフトパ
ワーかハードパワーかという話ではないで
すが、空想の話だからこそ逆に入り口とし
ていいし子供にも勧められる。もちろん SF
は現実の科学とは違うけれども、「こんなこ
とできたらいいな」と思って育った人が科

学者になるということは十分あります。SF
の方も SF の方でサイエンスに詳しい作家
もいるので、そのサイエンスの知見をほど
よく味付けして、少し嘘を混ぜて上手にま
とめて本当に現実の科学者が見てもなる
ような小説を書く人もいます。科学と SF
の協力関係はありますね。昔はもっと喧嘩
していたのかもしれないですけど。

——私自身アイザック・アシモフの小説が
好きで、アシモフの小説は現代の科学で言
うとありえないなってところもあるんです
が、やっぱり彼は科学者だったので、科学
に裏付けされた小説っていうのは面白いな
って思います。なので科学と小説が協力関
係にあるって言うのは良いなって感じます
ね。

海老原：そうですね。アシモフもそうで
すが作家とか科学者っていう風にくくられ
ない幅の広さがあります。アシモフって大学
でも講座を持っていて科学的な面もあり、
かつ作家でバリバリ作品を書いていた。今
じゃ当然考えられないような幅の広いバイ
タリティあふれる人だったので、なるほど
なという感じです。

5. 巽先生・小谷先生との思い出

——海老原先生が SF 研究やポストヒュー

マン研究されていく中で、巽先生から受け

た影響はありますか？

海老原：巽先生との付き合いは長いといえば長いんです。大学時代、私は慶應のSF研究会に入っていました。巽先生がSF研究会の顧問をしていて、実は大学一年の時に既に会っていました。SF研の新入生歓迎会やOB会に行くと、巽先生と小谷先生もその場に来て最近のSFの話をしてくれました。

文学部は二年から専攻に分かれて三年からゼミですよ。それ以前からなんとなく巽先生の存在を知っていたので、英米文学専攻に行こうかなと思い、英米行くんだったら巽先生のゼミかな、みたいな感じでした。なので、巽研究会の人よりはプラス二年くらい巽先生を知っていたという（謎の自慢）。小谷先生も一緒にSF研にいらしたので、この影響もあると思います。実際、小谷さんは色々遊んでくださって。小谷先生がやっているジェンダーSF研究会に誘っていただき、読書会やイベントに参加しました。大学生の時、アメリカのSF大会（ウィスコン）があった時にも一緒に行きました。そういう感じで、大学生の時からよく遊んでくれましたね。

巽先生や小谷先生はもちろん先生でもあるのですが、SFの世界のOBOGというか先輩というか偉い人というか……。大学の指導教官と学生というよりも、SFの師匠と見習いみたいな関係性かもしれないですね。

——飲み会などでは巽先生とやっぱりSFのお話をされていたんですか？

海老原：してましたね。二十年くらい経って、今思えばそれは役に立ってますね。何が役に立つかわからないものですね。

——巽先生とSFとの関わりが海老原先生の基礎になっているという感じなんですか？

海老原：そうですね。あと、巽先生からは本をよく頂きました。巽先生がSF研のみんなをちょいちょいと呼んで、私たちが家に行くといっぱいSFの本をサークル宛に寄贈してくださいました。それをサークルのみんなで読むことはしていました。サークルのSF力アップに繋がっていましたね。

——小谷先生からはジェンダーSFのいろはを叩き込んでもらった、と『ポストヒューマン宣言』のあとがきにありましたが、最近小谷先生とは会われましたか？

海老原：最近はまだ二年くらい会えていません。コロナ前のOB会で三年くらい前にお会いしたかと思います。OB会も私はちょっと顔を出すくらい感じなので、あまり一対一で話せていなくて。本当はもっとご意見伺いたいと思うんですが。

『ポストヒューマン宣言』の九章で扱った田中兆子『徴産制』はジェンダーSF研で賞をとっていたと思います。小谷先生とはジェンダーSFの話もしていたみたいです。今は直接のやりとりはしていませんが、間接的に小谷さんの後を辿っている感覚はあります。

——卒業後、大学の人とはいまでも付き合いがあるのでしょうか？

海老原：そうですね。先生はじめ、先輩・同輩・後輩とは。大学院修士を出てだいぶ経ちましたし、研究者でもないの、大学にはまったく行ってませんが、人付き合いは続いています。

——今は別のお仕事をされているんですか？

海老原：はい。サラリーマン仕事の合間合間に原稿を書いている感じですね。

6. “Maniac”に研究を続けられた秘訣

——お仕事もする中で、一途に研究を続けられた秘訣というのはあるのでしょうか。

海老原：難しいですね（笑）。私は学部を出て、修士の大学院を出て、その後「博士まで来たか？」と言われたんですが、そこはやめて就職しました。博士は基本的には大学の研究者になるコースなので、この選択は人生の岐路だったと思います。

好きなものでもずーっとやると疲れるから、適度に休みながらやった方が続くって話なのかもしれないですね。もちろん平日ずっと仕事して、家事育児して、そのあと本を読んだり原稿を書いたりというのはほとんど不可能なので、どうしても土日にやらざるを得ません。それだと時間に制限があるのは確かなんですが、と言って朝から晩まで自分の好きな研究だなんだをやり続

けるというのもまたしんどいような気がします。程よく日常の中に SF をまぶして、色々なところで「あ、これ SF だな」と発見する……という風に付き合っていた結果、長く続けました。そしてそれが蓄積されて、本になったのかなと思います。

SF 境界の人は兼業の人が多いです。作家さんも兼業だったり、ファンやライターさんも SF でお金を稼ぎながらも別の仕事も持っていたり。SF だけで食べていこうという人はあまりいないんです。そもそも市場規模も大きくないですし。ただ、みんな SF が好きで、離れたくても離れられずに一生の付き合いはしていくという感じですね。

「〇〇をやめて△△で食べていく！」というのじゃなくて、ある意味ダラダラやるというか。

7. 最後に

——海老原先生お気に入りの「ポストヒューマン」はありますか？

海老原：本で論じたどの人たちもいい人で、甲乙つけがたいです。『ポストヒューマン宣言』の中で強調したのは、みんな悩んでいるということです。ポストヒューマンと言うと、解脱し人間的な悩みがなくなった超越的な存在という印象があるかもしれませんが、色々な作品を見ていると全然そんなことはないですね。ポストヒューマンにな

ること自体が苦悩や葛藤を生んでいます。そういう悩みが人間くさくて好きですね。

——最後に、ゼミ生に向けて何か一言あればお願いします。

海老原：私が大学生活で楽しいなと思ったのは、ゼミでのディスカッションや暇な時間に友達と文学ふくめ様々な話をしたことです。自分の好きな文学について、どれほど語ろうとも周りから引かれなかったのは

(いやほんとは引いてたかもしれませんが)、大学のゼミだけかもしれません。今は大変な時期で、昨年からさんざん苦労したのではないかと推察しますが、演習やらゼ

ミやら少人数&ディスカッションの授業は大事に、楽しく、一生懸命やると、いいと思います。そういうのが「大学っぽい」かも。

☆海老原先生、お話ありがとうございました！ (聞き手：池田瑛莉)

海老原豊先生プロフィール

1982 年生まれ。慶應義塾大学大学院文学研究科英米文学専攻修士課程修了。SF 評論家。「グレッグ・イーガンとスパイラルダンスを：「適切な愛」「祈りの海」「しあわせの理由」に読む境界解体の快樂」で第 2 回日本 SF 評論賞優秀賞を受賞。著書に、共編著『3・11 の未来：日本・SF・創造力』（作品社）、共著『ポストヒューマニティーズ：伊藤計劃以後の SF』（南雲堂）ほか。
(小鳥遊書房ホームページから引用)